国立鳥羽商船高等専門学校の校祖

近藤真琴ものがたり

商船教育をはじめた明治の大教育家

目　次

第１章　商船教育のはじまりと鳥羽商船学校 …… 2

第２章　生い立ちと学問修行 …… 4

第３章　鳥羽での滞在と海軍勤務 …… 5

第４章　攻玉のおしえと攻玉社 …… 7

第５章　かな文字運動 …… 8

第６章　記念碑の建立と顕彰 …… 9

商船教育 110 年の記念切手とはがき

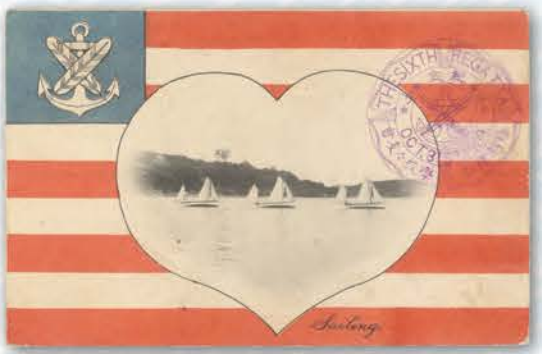
第1章

商船教育のはじまりと鳥羽商船学校

近藤真琴は日本で最初に商船教育をはじめた人です。東京に設立した学校「攻玉社」に明治８年（1875）９月、航海測量習練所を設置しました。岩崎弥太郎の三菱商船学校（現東京海洋大学）設立に先立つこと２か月でした。

明治 14 年（1881）８月には郷里の鳥羽にその分校として鳥羽商船黌（学校）を設立しました。設立にあたっては多額の私費を投じ、三重県の協力を得ています。設立にあたって、各方面に配布した「鳥羽商船黌設立主意」には、「日本の発展のためには産業の振興が第一であるので、その目的をはたすために貿易が不可欠であり、運輸に必要な船員を育成しなければならない。自分の故郷である鳥羽は良港であり、地理的にも歴史的にも商船教育の最適地である。」という真琴の考えが明快に述べられています。

「鳥羽商船黌設立主意」
明治 14 年 (1881)

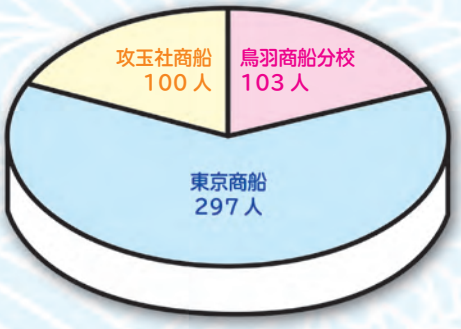


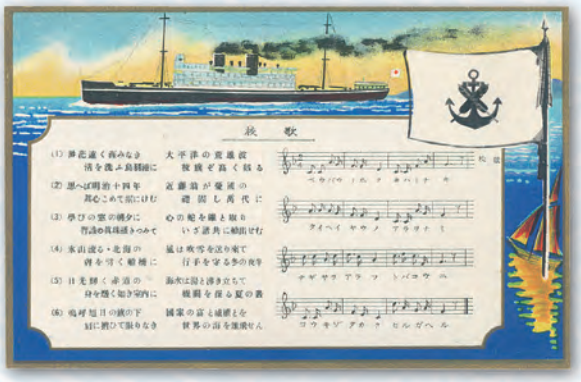
鳥羽町立鳥羽商船学校時代の絵はがき
明治 42 年 (1909)10 月 31 日

鳥羽商船黌は、その後、私立東海商船学校、鳥羽町立、三重県立、官立の商船学校を経て、昭和 26 年（1951）には国立鳥羽商船高校になり、昭和42年（1967）に国立鳥羽商船高等専門学校となって現在に至っています。特に東海商船学校、鳥羽町立鳥羽商船学校時代には鳥羽町や鳥羽の人々の絶大な協力と支援を得ています。これはひとえに真琴の努力と誠実な人柄のたまものであると言っても過言ではありません。昭和 56 年（1981）には創立百周年を盛大に祝いました。なお、現在では（令和５年４月）、商船学科と情報機械システム工学科の２学科体制となっており、平成 17 年（2005）には４年制大学と同等の教育、研究を行う専攻科が設置されました。

また、現在鳥羽と同様に商船教育を行っている国立高等専門学校は富山、弓削（愛媛県）、広島、大島（山口県）の４校があります。

■明治 9 年～ 30 年の高等船員数





三重県立鳥羽商船学校時代の絵はがき
「創立五十年記念」
昭和 6 年 (1931)

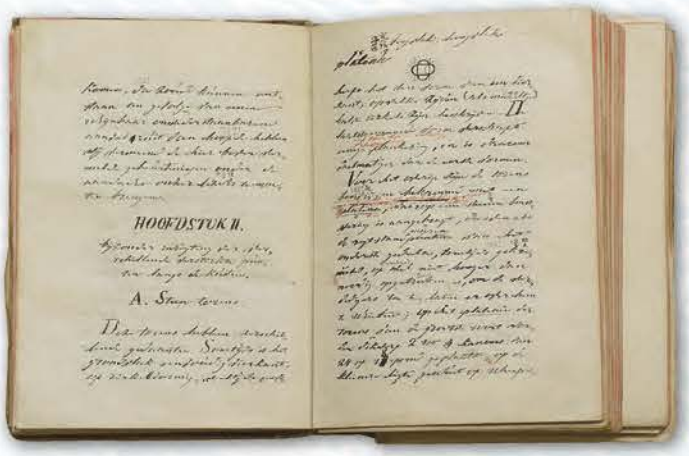
創立百周年記念碑
「百年を 守護の青峯 山青し」(山口誓子)
の句が刻まれています。

練習船「鳥羽丸」
平成 6 年 (1994) 建造

第2章

生い立ちと学問修行

真琴は天保２年（1831）９月２４日、江戸の鳥羽藩の上屋敷で鳥羽藩士の次男として生まれました。父の身分は高くありませんでしたが、祖先は学問の神様、菅原道真に連なります。そのため真琴は生涯、道真を尊敬し、梅の花をこよなく愛しました。この父が天保５年（1834）に病死したため、幼い真琴は母の誠子に訓育と学問の手ほどきを受けました。藩の学校で漢学（中国の学問）や日本の学問を学びましたが、嘉永６年（1853）には蘭学（オランダ語による西洋の学問）の修行を志しました。これはアメリカのペリー艦隊の浦賀来航という日本に一大転機をもたらした大事件によるものです。村田蔵六（後の大村益次郎）の鳩居堂で蘭学を習得した真琴は、さらに英語も習得しています。現在残されている「手書き航海書」（オランダ語）や「手書き英文典」（英語の文法書）を見ると真琴の猛烈な勉強ぶりを知ることができます。真琴は習得した語学を基礎として、科学や文学など様々な分野で驚くほど多くの著書を出版しました。



「手書き航海書」
（鳥羽市立図書館蔵）

第３章

鳥羽での滞在と海軍勤務

真琴は生涯に２度、郷里に滞在しました。１度目は文久２年（1862）１月、鳥羽藩士に蘭学を教授するのが目的でした。この時に真琴に教えを受けた鳥羽藩士の有馬百鞭はその後、漢学者となり、後に述べる「近藤真琴記念碑」の碑文を書きました。船の出入りでにぎわう鳥羽に滞在し、さらに的矢湾に入港した「咸臨丸」（太平洋横断で有名なオランダ製の軍艦）を見たことが、真琴の心を、船、航海術、測量術、海軍に向けました。翌年、江戸に戻った真琴は、幕府の軍艦操練所で学びますが、１年ほどの短期間で教授になりました。２度目は明治元年（1868）８月、明治維新による混乱の中、藩主に従って帰郷しました。真琴は藩主の要請で「博議院」（藩の議会）の議長となり、腕を振るいました。

鳥羽城絵図
（鳥羽市立図書館蔵）

２度目の鳥羽滞在中に真琴から教えを受けた人に、初代の町長で 20 年間町長を務め、教育の普及や町の発展に尽力した須藤富八郎がいます。また後年の真珠王、御木本幸吉も、この時に鳥羽の城山のふもとの鍋ヶ崎馬場屋敷に小さな家を建てて住んだ真琴母子の姿を見たことを記憶しています。

明治２年（1869）９月、新政府から海軍への勤務を求められた真琴は東京に戻り、築地の海軍操練所（後の海軍兵学寮、さらには海軍兵学校）の教官になりました。明治４年（1871）には兵学中教授となり、この年の末には軍艦「筑波」の初代艦長になっています。真琴の海軍兵学校勤務は明治 19 年（1886）２月まで続きました。この間、生徒の教育をする一方で教科書の編纂や各種の文書の出版をしています。さらに「攻玉社」を経営して教育と研究に打ち込みました。

「咸臨丸」

「航海表」
真琴らにより海軍兵学寮より刊行
明治８年 (1875)10 月
(鳥羽市立図書館蔵)

明治時代末の鳥羽港風景

第４章

攻玉のおしえと攻玉社

真琴は文久３年（1863）以来、塾を開いて教育をしてきましたが、明治５年（1872）、この塾を正式な学校とし、「攻玉社」と名付けました。初期の攻玉社生徒は海軍志望者が多く、後に海軍別科を設けるほどでした。攻玉社は商船教育や土木技術教育のほか、幼児教育や女子教育にも力を注ぎました。その後、多くの移り変わりを経て現在は東京の攻玉社中学校・高等学校となっています。

明治６年（1873）、真琴はオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会に一級事務官として派遣されました。ヨーロッパに進んだ科学や技術をもたらした教育の力、教育の方法に大きな関心を持ち、日本に役立てることを考えました。

攻玉とは玉（魂）を攻む（磨く）という意味で「玉（魂）を磨く努力をして自分自身を輝かせなさい。」という真琴の信念を簡潔に表しています。

攻玉社の校旗

真琴が博覧会事務局から出版した「子育の巻」

ウィーン万博での日本の展示

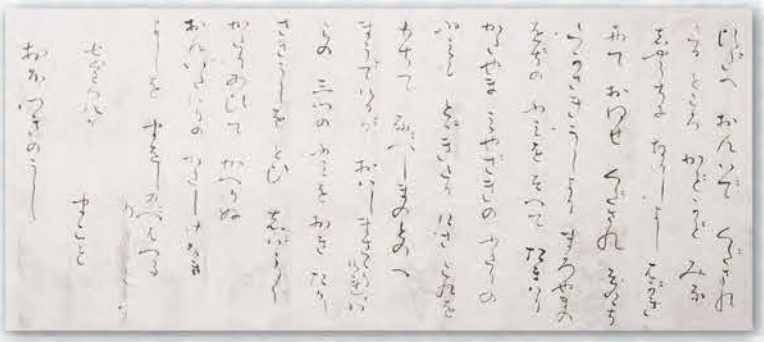
鈴木貫太郎（攻玉社の卒業生。終戦時の総理大臣）から
鳥羽商船学校に贈られた書「雄飛五大洋」

第5章

かな文字運動

大槻 文彦

真琴は知識、技術、文化を国民全部のものにするべきであると考えました。そのため、漢字や外国語を使わず、すべてを平易なひらがなで書くべきであると主張しました。このような考えの人々が集まって「かなの会」が結成され、真琴はその中心人物の一人でした。このことを実現するためには、どうしても国語辞書が必要でした。そこで真琴は明治18年(1885)9月に「ことばのその」と名付けた全6冊の辞書を出版しました。また明治19年(1886)に全文かな書きの「ちしつがくうひまなび」(地質学の初学書)を出版しています。このような努力はわが国初の本格的国語辞典を完成させた大槻文彦によって高く評価されています。


真琴から大槻文彦あての全文ひらがなの手紙
明治16年(1883)7月8日

「ちしつがくうひまなび」

「ことばのその」全6冊
第1冊「ふみまなび」は文法書

真琴のかな書きの和歌
「語り合う 心の底の友垣は いつわらぬより 結びそむらん」
(「うそをつかないことが親友となる第一歩」という意味。)

第6章

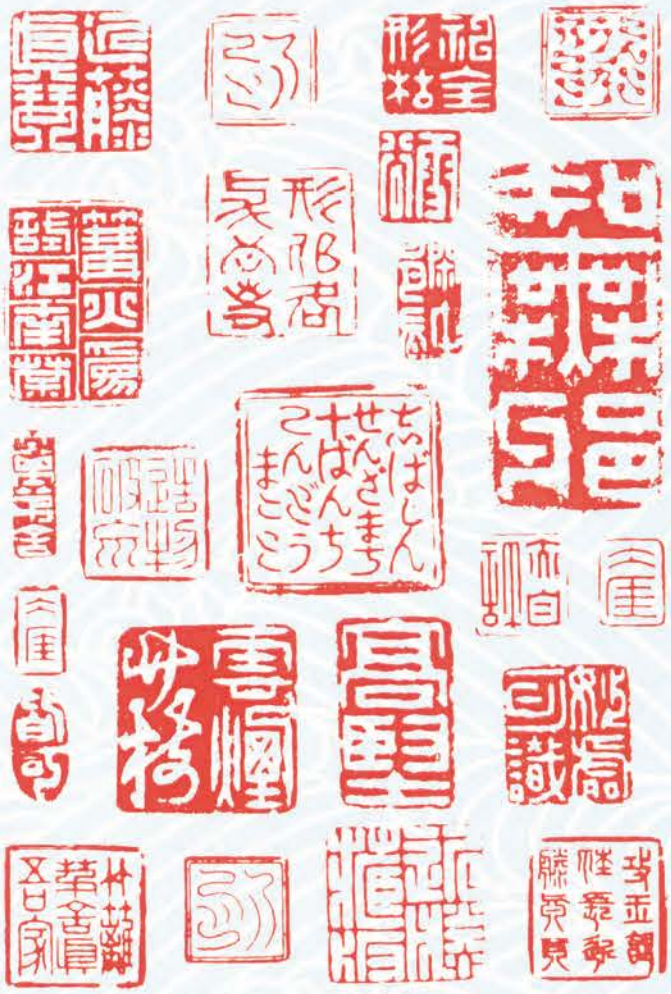
記念碑の建立と顕彰

真琴は明治19年(1886)9月4日、当時大流行していたコレラに感染して急死しました。鳥羽の町の発展に力を尽くした真琴は、鳥羽の人々から深く敬愛されていました。明治22年(1889)10月、鳥羽町の有志により旧鳥羽城の南に「近藤真琴翁記念碑」が建立されました。碑銘は旧知の勝海舟が書きました。この碑は現在、鳥羽商船高等専門学校の構内に移設されています。明治40年(1907)5月、東京で開かれた全国教育家大集会において、真琴は福沢諭吉、新島襄、中村正直らと並んで明治6大教育家の1人として追頌(亡くなった人への表彰)されました。昭和61年(1986)には商船教育110周年記念として真琴の肖像を描いた記念切手が発行されています。

勝海舟
1823-1899

福沢諭吉
1835-1901

記念碑



真琴作製の篆刻印章（さくせい　てんこくいんしょう）

昌平丸　千石船

天洋丸　大成丸

畿内丸　浅間丸

日精丸　鎌倉丸

鳥羽商船高等専門学校の校旗

百周年記念資料館

編集・発行：鳥羽商船同窓会

〒517-8501　三重県鳥羽市池上町 1-1
鳥羽商船高等専門学校内事務局
ＴＥＬ 0599-25-8045
E-mail:info@tobashousen-dousoukai.com